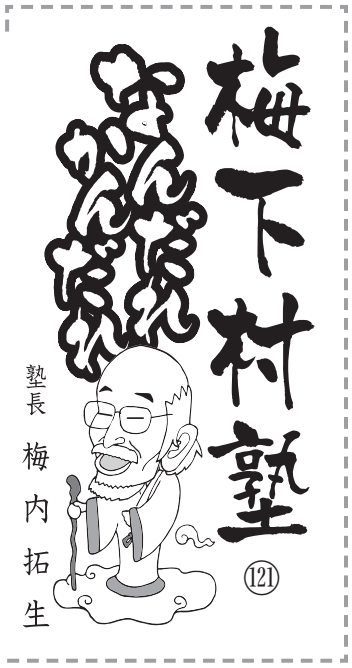
「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



（21世紀と地球規模の天変地異）

9月18日（水）の第1面には「大型団地も造成着手へ　長部・月山の53区画　防災集団移転促進事業　陸前高田市」が掲載されている。2011年3月11日の東日本大震災は政治、経済、文化への甚大深刻な傷跡を残し、復興計画の策定、実行も思い通りには進まない。故郷より、新しい町づくりへの提言に関するメールが送られてきた。その中で岩手県議から出馬して知事選挙に挑戦した高橋博之氏の「東日本大震災復興計画私案」にはみるべきものがあり、ここに以下の骨子を引用して述べる。

①集落の高台移転のほかに、平地への居住も認める

②防災対策は、「護岸施設」だけに頼らず、「逃げること」を基本にし、従来の防災哲学だった「自然との対決路線」から脱却する

③平地の危険区域では、私有地を自治体が買い上げ、住民に「貸与」する仕組みを導入する

④これらは「共生・共死」の思想と「レンタル」の発想にもとづくものである

（21世紀と地球規模の天変地異）という視点に立てば高橋博之氏の「東日本大震災復興計画私案」の①②③④の意図するものが伝わってくる。

大船渡短歌会9月例会の作品をこれら（21世紀と地球規模の天変地異）と「東日本大震災復興計画私案」との視点から評を述べてみる。

（弔いと祭り）

重機の音の合間に聞え来弔ひ二時四十六分の鐘は荘厳

再起掛け道中踊りに町びとの浴衣の映える梅雨明けの路　及川智香子

弔いと祭り、夢と現実、生活と心の世界の襞の蠢きが伝わってきます。

閑さや岩にしみ入る蝉の声（芭蕉）

いかのぼり昨日の空のありどころ（蕪村）

これらの世界がつながったイメージですね！

（有と空）

朝餉終えそれぞれ職場に散りゆきて残るは一足逝きし息の靴

洗い髪漉くスタップにありがとうとシャボンの様な笑いをこぼす　千葉　ミヨ

シャボンで髪を漉く、シャボンは消えてなくなる、家族が出かけた後に残っている玄関の一足の亡き息子の靴、（有と空）の世界のイメージがつたわってきます。

般若心経の「色即是空　空即是色」の世界が展開されております。

（弔いと祭り）、（有と空）詠作者の年齢によって詠む世界の響きが異なってきますね！

（弔いと祭り）と（有と空）は4）の「共生・共死」の思想と「レンタル」の発想に深く響き合っている。3・11の大震災で大自然に命を流したものへの弔いには祭りがなくてはならない。そこには「共生・共死」の思想がつらぬいております。

（有と空）に関しては、生きている有の全ては空の力を借り受けて生かされており、このことへの始末は感謝を込めて行われなければならない。

「飛ぶ鳥跡を濁さず」の昔の言い伝えは鐘の音に乗って響いて来る。東京大学名誉教授の松井孝典氏も宇宙、地球、生命、文化に関する著作で「レンタル」の思想について述べている。

ふるさとの訛りなつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく（石川啄木）

義理と人情、孤独と村祭り、向こう三軒両となり、人の世は色々なかたちでつながっております。そのつながりの調和のさじ加減に生きている妙味が生まれて来ますね！

（蝉しぐれと草木）

夏三たび厳井にてきく蝉しぐれ老いて相ふは庭のひおうぎ

おのづから芝に混りてねじり草うす紅色の細き花咲く　橋爪　里美

若き日の蝉しぐれ、老いの蝉しぐれ、芝に交って咲くうす紅色のねじり草、周りの世界とのエネルギーのやりとりから生命は生まれる。生命の世界は借り受けたエネルギーを基手に新しいエネルギーを生み出してお返しをすることの循環である。（蝉しぐれと草木）には独占ではなく、借用循環という「レンタル」思想の姿がうかんでくる。

閑さや岩にしみ入る蝉の声（芭蕉）

（虹と影）

影もまたよく飛ぶ揚羽が先導し父祖の墓道汗ふき登る

首太き蛙は池の端にゐて洗車の虹にジャンプをしたり　田端五百子

日影も月影も現実の世界と心の世界を行きしております。蛙は虹の世界と行き来しておりますね！

芭蕉の以下の2句と響きあいますね！

蝶の飛ぶばかり野中の日影哉（芭蕉）

古池や蛙飛びこむ水の音（芭蕉）

子孫（こまご）の現代とはどのように響きあいますかね！

（分かれる世界と分ける世界）

緑濃き「ホップ」は道を二分けて歩む人等は背伸びして見つ

湯の宿の愛隣館に子らと来つ二年おくれの傘寿の祝ひ　岩渕　綾子

分けて分かれてから、交流が始まります。親子の情愛、恋人や友人同士の情愛の世界ですね！

瀬を早（はや）み　岩にせかるる滝川（たきがは）の　われても末（すゑ）に逢はむとぞ思ふ（百人一首　崇徳院77番）

「共生・共死」と「レンタル」の思想に響きあいますね！

（心を漉く）

さんご島浮かぶあはひの海の面をかもめはなべて身を締めて飛ぶ

洗い髪漉くスタップにありがとうとシャボンの様な笑いをこぼす　中村　光

「心を生む」とは「心を漉く」ことですね！ライン川の岩に立って歌っているローレライは髪をすくいながら、どんな心を漉っていたのでしょうね！

ローレライの歌「なじかは知らねど心わびて昔の伝えはそぞろ身にしむ」と旧大船渡市民歌はさんご島をどよもしわって飛ぶかもめを詠っており、何かひびきあうものがありますね！

（東海新報記事から）

9月21日（土）の世迷言は古代中国の大思想家老子の「天網恢恢疎にして漏らさず」に触れて、〝山梨県の県議員らが行った視察旅行が「物見遊山」と裁判所から判定されたことは常識が健在の証としたい〟と述べている。世間には、これに類似したことがらが多数報道され、日常茶飯事のこととなっている。

一方、同日の第1面には「震災前後の市民活動結ぶ　支援協議会を旗揚げ　NPOと市、社協が連携し　大船渡　大船渡市を拠点に活動する三つのNPO法人と市、市社会福祉協議会は20日、大船渡町のおおふなと夢商店街で同市市民活動支援協議会の設立総会を開いた」と報道している。

政治家や公務員は古来から「公僕の徳」が要求されているわけであるが、これがうまく機能していないのが世の中である。「震災前後の市民活動結ぶ　支援協議会」の活動に期待するものが高まっている。

「公僕の徳」は「飛ぶ鳥跡を濁さず」という諺や「レンタル」の思想にも通じている。即ち、「レンタル」の思想は物質の世界、生物の世界、文化の世界の底に共通の流れとしてあるものである。（21世紀と地球規模の天変地異）への対応には「共生・共死」の思想と「レンタル」の発想が大きな役割を果たすことと、その育成を急がねばならない。この視点に立てば、東海新報の記事は腹に響いて来る。